

『ブラック・アテナ 第1巻：古代ギリシャの捏造』日本語版刊行記念シンポジウムに寄せて

マーティン・バナール

1. 『ブラック・アテナ 第1巻』が目ざしたもの

古代ギリシャの起源に関するこの書は、ある意味でヨーロッパ中心主義的な発想から書かれたものである。というのは、古代ギリシャは、想像の世界でも、また現実としても、ヨーロッパ文明、西洋文明にとって中心的な位置を占めるからである。すべての美しい芸術と自由な社会制度の源泉としてのギリシャ像は、自らの文化が他のどの文化よりも優れているとする西洋人の自負心にとって欠かせないものである。

古代ギリシャの起源については多くの伝承や記述があるが、私はこれらを「古代モデル」と「アーリア・モデル」としてまとめるのが便利だと考えた。私の世代の人間は、ギリシャ文明がインド・ヨーロッパ語を話す北方からの侵入者が、白人であるが非インド・ヨーロッパ語を話す原住民を征服することで成立したとする「アーリア・モデル」を教えられて来た。

これに対して「古代モデル」とは、ギリシャ文明の成立がエーゲ海の南と東の方向からの異邦人の到来によるもので、これら異邦人が灌漑、武器、アルファベット、そして宗教を素朴な原住民に教えたとする見解である。このモデルは少なくとも紀元前5世紀には通念となっており、古代、初期キリスト教、イスラム教、ルネッサンス、啓蒙時代を通じて、一般的に受け入れられていた見解である。このモデルが打ち破られ、放棄されるのは、19世紀になつてのことである。

『ブラック・アテナ』第1巻で私が行ったのは、「古代モデル」の敗退と「アーリア・モデル」の勝利の背景には何があつたかの考証である。私が主張したのは、「古代モデル」は古代ギリシャ成立に関する説明が不適切だったという理由で放棄されたのではなく、18世紀から19世紀にかけてのヨーロッパにおける経済的・社会的発展に由来する一般的な知的傾向に矛盾すると見られたからだということである。

2. 「古代モデル」敗退と「アーリア・モデル」勝利の背景

「古代モデル」が放棄されるにいたるこの一般的な知的傾向は、(1)「進歩」思想の勝利、(2)ロマン主義の勝利、(3)人種主義、という3つの見出しにまとめることができる。

(1) 多くの社会において、長期の時間の経過は退歩的、あるいは循環的に見られ、現世における進歩という考えは比較的稀である。進歩という考えがヨーロッパに登場するのは、古代の人間よりは自分たちが優れていると自覚するようになる16世紀のことである。その基準になったのは、火薬、羅針盤、紙と印刷術であるが、実はこれらはすべて東アジアから来たものである。18世紀になると「進歩」が支配的な考えとなる。このことが、古代エジプトとギリシャの相対的評価に影響する。エジプトがギリシャより古いことは誰もが知っていたことであり、かつてはそれがエジプトの優越性を証明するものと考えられていた。それが進歩という考えの登場とともに、新しいギリシャが古いエジプトを凌駕したと見られるようになったのである。かつては、成熟期の英知をもっていたエジプトに較べると、幼年期の無知のかたまりと見られていたギリシャが、純真で英気あふれる姿で見られるようになったのである。

(2) 理性ではなく感情の時代である幼年期をポジティブに見ることは、ロマン主義の考えと合致する。1680年から1790年にかけては啓蒙主義が支配的であったが、1790年代になるとロマン主義が支配的な考えとなる。啓蒙主義では空間、秩序、安定が好まれた。啓蒙主義者が長期にわたって継続するローマ、中国や古代エジプト帝国を賞賛したのはこのためである。これに対しロマン主義が関心をもったのは時間と運動である。ロマン主義者が小規模で、不安定で、動的なスコットランド、スイスや古代ギリシャを選好したのはこのためである。さらにロマン主義者は、寒冷・温暖な気候のもとで育つ文化が、道徳的にも知的にも優れていると信じた。この信念はスコットランドとスイスの説明にはなるが、地中海気候のギリシャには適合しない。そこで、ギリシャ人の祖先が北方の厳しい気候のもとで育った人種だとすることで説明がつくことになる。

(3) この説明をさらに押し進めたのが人種主義である。近代における人種主義は17世紀に始まるが、それは大西洋を越えての奴隷貿易との関連においてである。奴隷貿易を宗教とは違った要因で説明するために出てきたのが、外面的特色と皮膚の色による人種観である。アフリカ人を自分たちとは違った人間であるとするすることで、ヨーロッパ人は非人道的な奴隷貿易を正当化したのである。ただ、18世紀においては、ヨーロッパ文明の源流であるエジプトがたまたまアフリカに位置していたという不都合な事実をどう取り扱うかという問題があった。この不都合な事実を避けるのに使われたのが、古代エジプト人は白色人種であった、あるいは少なくとも「東洋人系」であったという主張である。

しかし1770年代になり、スコットランド人ジェームス・ブルースが上部エジプトはかつてエチオピアの領土だったと主張するとともに、エジプト文明は縮れ毛の黒人により形成された文明だということになった。19世紀初期の古典学者は、もともとロマン主義的な見地からエジプトを良く見ていなかったのが、エジプトがアフリカに属するというこの新しい見解に反対しなかった。同じ頃勃発したギリシャ独立戦争は、若いヨ

ヨーロッパと古いアジア・アフリカとの戦いと見られた。さらに「科学的人種主義」が台頭するとともに、白人であるヨーロッパ人を絶対的に優れた人種とする考えを否定する「古代モデル」は鼻持ちならないばかりか、非科学的な見解となったのである。

「古代モデル」敗退のさらに重要な要因としては、言語学における展開がある。具体的には、1830年代におけるインド・ヨーロッパ語族についての学問的解明とギリシャ語がその語族に属するという認識の登場である。しかもすべてのインド・ヨーロッパ語族の起源がバルカン半島の北方地域であるとするので、インド・ヨーロッパ語を話す人種がエーゲ海に移住してきたか、あるいは征服したということになる。19世紀、20世紀の古典学者はギリシャ語がインド・ヨーロッパ語族に属することを「古代モデル」が主張するエジプトやレバントからの文化借用を否定する要因として使用したが、私が「修正古代モデル」で主張するのはギリシャ語に関するこの言語学の結論と古代歴史家の叙述とを組み合わせたものである。

以上が『ブラック・アテナ』第1巻の概要である。第2巻と第3巻では「修正古代モデル」が「アーリア・モデル」よりもより「実りのある」のモデルであることが、考古学や言語学の最新の研究成果を取り入れながら考証されている。

3. 『ブラック・アテナ』とその批判者たち

1987年に『ブラック・アテナ：第1巻』が出版されて以来、リベラルな批判者たちはそこで概略された私の研究に対してバランスの取れた評価を行ってきている。彼らの批判の要点は、私の研究の歴史学的考証は認められるが、考古学的考証は疑わしく、言語学的な考証は間違い沙汰というものである。私自身の評価はこれとは大分異なる。歴史学的考証が基本的に健全であるとする点では彼らと同じであるが、ただ私が「アーリア・モデル」の勝利を1830年代としたのはやや単純化したきらいがある。というのは、19世紀半ばまで「古代モデル」を支持し続けた学者はいたからである。私の考証での最大の弱点は考古学的考証である。というのは、東地中海地域で物質的な交流が多くあったという証拠はあっても、その交流が征服によるものか、政治的支配によるものか、文化的影響によるものかを決定できないからである。

言語学的考証については、私はリベラルな批判者たちは誤っていると思う。私としては、言語に関わる私の考証はもっとも信頼性のあるところだと思う。まず、ギリシャ語がインド・ヨーロッパ言語であることには何ら疑問の余地はない。音声と語形にそれが見られる。しかし語彙については、他のインド・ヨーロッパ言語に結びつけられるのは40%以下である。人体部分、家族関係、家畜など、日常生活に関わる語は「土着」語であるが、社会関係、政治関係、贅沢品、抽象思考、宗教用語など、詭弁に関わる語はインド・ヨーロッパ語からのものではない。私は、こうした語はエジプト語、あるいは

セミ語から来たものであると見ている。ちなみに、日常生活に関わる語は土着語、抽象的な語は外来語というギリシャ語の2重構造は、日本語の構造と似ているところがある。

私の考証についてもっともきびしい批判をしてきたのは、古典学者と地中海地域の古代史研究者である。その内の50%は私の名前が出るだけでもあからさまな嫌悪感を示し、20%は私の考証は問題もあるが、大筋では正しい方向に向かっていると見ている。残りの30%は私の考証には賛同しないものの、私の研究が活発な議論を刺激したと私の貢献を認めている。

古典学、古代史以外の分野の学者は、私の考えのどこがおかしいのか理解しかねるとしている。彼らの目からすると、私が見るのと同じように、エジプト、レバント、ギリシャという3つの文化が3千年以上も地理的に近いところで共存していたということを考えれば、これら3つの文化間にはかなりの交流がなかった方がかえって不思議である。また、ギリシャ文明よりもエジプトとレバント文明の方が時代的に古く、より豊かで、かつ精妙であったことを思えば、紀元前第一千年期の終わりまでは、文化の流れは南と東から北方に向けてのものであったと考えるのが当然である。

4. ブラック・アテナ論争に見る学会の現状

私の考えが常識的にも妥当性を持っているという現実直面して、私の批判者たちがもちだしてきたのが「専門主義」である。彼らに言わせれば、「物事は目に見えるほど簡単ではなく、それを深く理解するには専門的な訓練が必要だ」ということになる。彼らからすると、私は正しい方法論を身につけておらず、したがって私がやったのは、仮説の上に仮説を重ねることだということになる。ただ、いわゆる通念というものもこうした手続きで形成されるということを彼らは忘れていようである。私は、間違っただけの権威者を引用した、あるいは正しい権威者の間違っただけの作品を引用しているとも批判される。しかし、私の研究を真摯に受け止めている批判者は、私の考証方法が新しい資料を扱うのに有用であることを認めている。ある批判者のことばを引用するなら、「パネルは間違っただけで正しい結論を導きだす驚くべき習癖の持ち主である。」

さらに私は純粋に学術的な問題を「政治化」したとの批判も受けている。私が第1巻で行ったのは、学者といえども自らが生きる社会から完全に中立的ではありえないことを示すことであった。特に、「アリア・モデル」と古典学という学問については、その形成は極めて政治的であったと言える。

論争の外部にいたものからすると、そもそも私の研究が学者間にこれほどまでの論争を引き起こした理由が分からないかも知れない。私からすると、論争は起こるべくして起こったと言える。専門家の立場から見ると、私は4つの大罪を犯したことになる。

(1) 中国研究が専門の私が彼らの専門領域の問題について著作を発表することは、許されない侵略行為である。彼らからすると、私は彼らが一生かかって習得した言語やその他の資格をもっていないからである。

(2) 私は専門家に対して、彼らがこれまで研究してきた基本的な問題について誤りを犯したと告げている。

(3) この専門家の誤りを、私は彼らの人種主義や反ユダヤ主義のせいにはしていないのではなく、彼らが研究している学問分野の知的枠組みを形成した先駆者たちの人種主義や反ユダヤ主義のせいだとしている。

(4) 私が主張していることは、正しいのかもしれない。

これらの罪のどれか一つを犯したとしても学問の世界では死刑に値する。ましてや、これらの幾つかを犯したとなつては、悪逆極まりないということになる。

専門家が発するもっともこじつけた弁護は、「その（私が主張する）ようなことは、もうとっくに分かっている」と述べることである。実際、彼らの学問の形成についての歴史を書きかえようとしている学者もいる。ギリシャに対するオリエントの影響を認めることは、かつては末流であったが、今では主流となっている。こうすることで、私の研究が先駆的なものであることを認めることなく、純粋に学術的な問題を「政治化」したという非難を私にできるのである。

古典学と古代歴史学の専門家からの反応は、かつて中国で行われ、またある程度現在の中国でも行われている慣習に似ていると思う。暴動とか反乱が鎮圧された後、為政者はその指導者を処刑するが、その要求は聞き入れる。こうすることで、為政者としてはその権威を失うことなく、柔軟な為政を行うことができるのである。

5. 『ブラック・アテナ』と21世紀の世界

1960年代以降の学問世界での展開を見ると、古代ギリシャの成立におけるカナ人とフェニキア人の貢献は、徐々にではあるが受け入れられつつある。その一方、ギリシャ文明の多くをエジプトに帰するとする「古代モデル」の叙述は、いまだ受け入れられていない。また、言語学的にギリシャ語へのアフリカ・アジアからの影響については、依然受け入れられる状況ではない。

「古代モデル」を救済する道はまだまだ険しいと言えるが、時代精神の流れからすると、「アリア・モデル」を固持することは難しくなって来ていると思う。学問の世界における伝統と慣性ということを考えれば、「アリア・モデル」が一朝にして放棄されることはないであろう。しかし、社会全般から見ると、いかなる意味での人種差別も社会的に許されるべきでないという論理が広がってきていると思う。第2次大戦後のイスラエルの建国、アメリカにおける公民権運動、さらにはアジアからの日本の台頭といった要因がその背景にある。私としては、21世紀の早い段階で「アリア・モデル」

は放棄され、そしてそれとともにこれまでのヨーロッパ中心主義の歴史観が見直され、新しい「混成モデル」のもとで、平和で実りある 21 世紀の世界が展開してゆくことを日本の皆さんと共に期待してやみません。